
山梨大学教育学部附属教育実践総合センター

センターだより第176号(通巻第243号)

2019年8月30日 発行
山梨大学教育学部
附属教育実践総合センター
TEL 055-220-8325, FAX 055-220-8790
E-mail: jissen@ml.yamanashi.ac.jp
URL: http://www.cer.yamanashi.ac.jp/

■山梨大学教師塾「教師力養成講座」(第1回)の開催

教育学部附属教育実践総合センターでは、7月31日(水)に令和元年度山梨大学教師塾「教師力養成講座」を開催しました。この事業は令和元年度戦略・公募プロジェクト(教育関連プロジェクト)「山梨大学教師塾プログラム」の採択を受けて実施したものです。「後期実習は前期と校種が違うけど…。」「『「見通し」と『振り返り』って…。』『主体的で対話的な学びって…。』といった不安や疑問に答えるべく、学部3年生の121名が参加して開催されました。

まず、全体会において、中村学部長ならびに田中センター長よりご挨拶・ご指導をいただきました。その後、次の6講座に分かれ、各方面で活躍されている現場経験豊富な講師より指導をいただき、学びを深めていきました。

- 小学校 国語科を中心にした講座 講師：小尾 俊彦 先生
- 小学校 算数科を中心にした講座 講師：小池 孝二 先生
- 小学校 外国語活動・外国語科を中心にした講座 講師：深沢 裕也 先生
- 小・中学校 特別の教科 道徳を中心にした講座 講師：田中 一弘 先生
- 中学校 国語科を中心にした講座 講師：重田 誠 先生
- 中学校 数学科を中心にした講座 講師：久島 宏 先生
- ※ 上記講師のほかに、大学教員13名がピア・サポーターとして指導にあたりました。

各講座の流れは下記のとおりでした。

- | |
|--|
| <p>① 示範授業 (30分)</p> <ul style="list-style-type: none">・「見通し」と「振り返り」の過程のみ記述した1時間分の指導案を配付する。・「見通し」の過程を示範する。学習課題(学習問題)の設定などを中心にする。・「振り返り」の過程を説明する。学習課題(学習問題)に対応した「まとめ」について板書やノートまとめとかかわらせながら解説する。 <p>② 指導案の書き方及びピア・サポートの時間 (30分)</p> <ul style="list-style-type: none">・示範授業を受け、「展開」の部分をグループになって立案するよう指導する。 <p>③ 模擬授業(学生)及びピア・サポートの時間 (60分)</p> <ul style="list-style-type: none">・立案した「展開」の部分について、概要を発表するよう指導する。・発表をもとに互選等して発表グループを決め、模擬授業を行うよう指導する。・模擬授業について講評する。 <p>④ 授業実践例等(講師) 20分</p> <ul style="list-style-type: none">・講師による「展開」部分を示範する。もしくは、実践例を紹介・解説する。 |
|--|

受講した学生のアンケートからは、以下の回答が寄せられました。

●教師力向上にかかわった回答

- 実践的な知識を、実際の授業に添って考えることができたことがよかった。
- 子どもの考え方に寄り添った考え方を学ぶことができた。
- 自分の考えになかった「発問中心」の考え方を学ぶことができた。
- 課題解決を目標にするのではなく、もっと深くまで考えさせる大切さと展開のヒントを理解できた。
- 評価規準のつくり方や展開のつくり方など、難しさや楽しさを感じることもできた。
- 子どもにとって1つの答えを求める発問ではなく、「自分はどう思ったか」を問うことが勉強嫌いをなくすのかと気づき、とても勉強になった。
- 「指示より問いを」という言葉が響いた。

●教育実習とかかわった回答

- とても貴重な時間だった。教育実習が終わったからこそわかること、後期実習があるからこそ見つめられることがあった。
- いろいろな「なるほど」があったので、小学校実習で使えるようにしたい。
- 中学校実習を控えて、少し不安があったので、参加してよかった。
- 9月に教育実習を控えており、授業づくりのヒントを得ることができた。
- 教育実習や自分自身の経験から感じていた授業の難しさや疑問が解けたような気がした。
- 前期の実習を振り返りながら、理解を深めることができた。
- 後期実習を控えているので、声かけの仕方や指導案の書き方など参考になり、不安が軽減された。

●講座の展開や内容にかかわった回答

- 講義形式でなく、自分たちが主体的に授業に参加できるような講座でとても分かりやすかった。素直に興味をもてる授業展開だった。
- 自分たちで授業展開について考える時間がよかった。
- 授業でのポイントをつくる前と模擬授業後にフィードバックがあり、より理解が深まった。
- 発言機会があったことで当事者意識をもつことができた。
- 自分たちで考える時間が多く、また意見を交流することで、ほかの意見もたくさん知れて考えが広がった。また、メモが取りやすい資料でよかった。
- 映像を見て指導案を書き出すことがよかった。実際の場面で用いられている指導案を見ることができたことがよかった。
- 終始、楽しい雰囲気講座が行われよかった。実際の教材やテストの問題を用いて、児童の誤答の背景を考えるきっかけになったこともよかった。
- 3時間と聞いてとても長いと思ったが、参加するととても短い時間を感じた。
- 教師になろうと考えている人にとってみればよい機会だと思う。

●講師の姿から

- 教員志望ではないが、改めて教員は素晴らしい職業だと思うことができたし、自分の仕事に自信と誇りをもっている方のお話を聴くことができて非常に勉強になった。
- 先生が自分の体験をもとに話してくれたことがよかった。
- 先生自身が自信と誇りをもっている方だった。プロフェッショナルのお話が聞けて非常に勉強になった。
- たくさんの準備をしていただき、3時間があっという間に終わった。
- 講師の先生がとても真剣に積極的に講義をしてくださったので、とてもためになった。

教師になるための資質や能力向上に資する学びだけでなく、講座の展開そのものが授業づくりに参考になったこと、講師の姿勢から指導者として・職業人として大切なものに気付いたことなど、様々な成果をうかがうことができ、多くの学生にとって有意義な講座となったことがわかりました。

■「子どもと教師の成長を結ぶ教育評価研修会（富士・東部地区、中北地区）」が開催されました

第3回目（富士・東部地区）の研修会が8月8日（木）に「都留市まちづくり交流センター」を会場に開催されました。また第4回目（中北地区）の研修会が8月9日（金）に「北巨摩合同庁舎」を会場に開催されました。

小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、教育事務所の若手からベテランまで多くの教員が参加し、充実した研修会を行うことができました。参加者数は、富士・東部地区が38名、中北地区が56名でした。また、山梨大学からもそれぞれ6名の教員が参加しました。

その内容を簡単にご紹介します。

まず初めに、昨年度まで山梨大学の理事・副学長であった堀哲夫先生から、OPPA論の概要説明がありました。堀先生は、OPPAの開発者であり、全国的に大きな影響力をもつ先生ですが、子どもの変容に対する意識を知るためにOPPシートが重要な役割を果たす事などを、わかりやすく説明されました。

続いて、富士・東部地区では、法政大学理工学部講師の辻本昭彦先生から、中北地区では、埼玉大学教育学部准教授の中島雅子先生から、OPPシートを使った実践事例の紹介や、参加者相互の演習による実習指導などがあり、さらに研修を深めることができました。

最後に、参加者一人一人が、当日の研修会のOPPシートを作成し、自らの変容を確認することができました。

今年度の評価研修会はこれですべて終えることとなりますが、これからの教育評価の柱ともなるべきOPPAについて、わかりやすくまた楽しく学ぶことができた研修会となりました。

●参加者の感想

- 本質的な問いを指導案を作成するときに取り入れることで、何を学ばせたいのか、何に気付かせたいのかが、明確になることがわかった。
- ワークショップを行い、知らない先生方と交流したことで、知らない自分の良さに気付くことができた。
- 今日のお話の中で、本当に力をつけたいことは問いの形にして確認していくこと、問うことの大切さを改めて感じられました。そのために本質的な問いを自分の中にしっかり持つことの大切さに気付きました。
- 教師だけが学習者の成長を分かっていたらいいのではなく、学習者自身も自分の成長が分かるような授業改善をしていきたいと思いました。
- 道徳や部活動等でのOPPA活用は、目からうろこのような感覚だったので、是非活用していきたいと思いました。
- 子どもが成長できる授業づくりというと、とてもハードルが高い気がするが、一時間ごとにそれは達成されるべき、当たり前のプロ教師の仕事なのだと改めて痛感しました。これまでの「評価」の感覚との違いを考えさせられました。子どもがもっと本気で「考える」瞬間を生み出す授業をしたいと思います。

■センターパンフレット（令和元年度版）を発行しました

実践センターの組織や活動内容等を広く知っていただくための「山梨大学教育学部附属教育実践総合センター パンフレット（令和元年度）」を7月下旬に発行しました。教職支援室の拡充改組や模擬授業室の紹介など、実践センターの最新情報を伝えています。

パンフレットのデザインも一新しました。表紙にある4色の色鉛筆は、実践センターの4つの部門に対応し、4つの部門が連携・協力して、山梨県の子ども、教育、学部・センターの明るく夢のある「未来」を描いていきたい、という思いを表現しています。

実践センターの活動について、引き続き御理解と御支援をよろしくお願いいたします。



これまでのセンターだよりの一部は、 <http://www.cer.yamanashi.ac.jp/centerdayori.html> で見るすることができます。